

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24531107

研究課題名(和文) 教師としての成長を授業実践力の視点から把握する実証的方法に関する研究

研究課題名(英文) A Study on an Empirical Method to Identify Teacher's Professional Development from the Viewpoint of Practical Ability in Lesson

研究代表者

高木 幸子 (TAKAGI, Sachiko)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：70377175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、授業実践力の視点から、教師としての成長を把握する方法を実証的に構築することである。そのために、15人が行った32時間の授業を収集し、発話や教授・学習行動を分析した。また、教育実習生と教師の授業を比較し違いを検討した。

その結果、授業実践力の構成要素を整理できた。教員養成段階から採用後10年程度の期間における授業実践力の変容を把握できた。授業経験の異なる授業者による授業比較から、授業者の考え方や授業スタイルが子供の学びの質に影響を及ぼしていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the method to identify teacher's professional development from the viewpoint of practical ability in lesson. 32 lessons were analyzed, both from teacher's and learner's points of view. The differences of opinions and teaching styles between a student teacher's and expert teacher's lessons were analyzed.

The results are as follows: the framework of practical ability in lesson consists of 7 elements. Development of practical ability in lesson for the period of around ten years after adoption from a teacher training stage was analyzed. Through the whole lessons, children's level of recognition was different in two settings. In the student teacher's lesson, children reported the pleasures and failures of their plans and ideas. In the expert teacher's lesson, children reported the pleasures of making perfect bags. In sum, the differences in teacher's opinion and teaching styles influenced the quality of students' learning.

研究分野：教科教育

キーワード：授業実践力 実証的方法 教師の成長

1. 研究開始当初の背景

(1) 諸外国でなされている教師教育改革の傾向として、教育現場でのOJTの重視、明確な基準を示した資格要件やそれを出すための制度の検討が指摘されている(上野ら2005)。一方、日本では、実践的指導力の養成が強く求められているが、養成から採用、研修につながる一貫した理念は示されておらず、教員養成段階においても大学の積極的な取組みが待たれている。

(2) 教師としての成長をとらえる視点として、養成段階の授業実践そのものを取りあげて論じている先行研究は少なく、実証的な研究の蓄積が切望されている。

2. 研究の目的

本研究は、教員養成教育において重視すべき実践的指導力を抽出するために、教師としての成長を授業実践に関わる力量形成の視点から把握する実証的方法論の構築を目的としている。

具体的には、次の3つの内容を推進し、その結果を基に考察を深める。

- (1) 授業実践の質に影響を及ぼす教材や教授方略などの良否違いを把握する先行研究の収集・分析。
- (2) 大学3年次教育実習授業データを保持している学生の、勤務校(卒業6年~8年経過後)での授業データの収集・分析。
- (3) 異なる熟達ステージに属する学生・教員による共通教材(共通題材)を用いた授業実践データの収集・比較。

3. 研究の方法

本研究は4年計画で進める。

(1) 研究1~3年目は、主に授業実践の良否に影響を及ぼす教授技術や教授方略に関する理論研究・先行研究の収集・分析を行う。また、教育実習授業データを保持している卒業生の授業実践データの収集を行う。具体的には次の通りである。

【評価枠の設定】：授業観察および教師の成長として把握する枠組みを設定する。

【理論研究】：授業実践の良否に影響をおよぼす発話や教授行動、教材や教授方略に関する文献の収集を行うとともに、基礎理論や考え方を整理する。

【実証研究(事例研究)】：主に卒業後7年目となる追跡対象者の勤務校に赴き、授業を観察するとともにビデオ記録を基にデータの収集を行う。授業記録データは、発話プロトコル及び教授・学習行動をデータ化する。分析にあたっては、研究代表者のこれまでの研究で用いている分析の枠組みを基本枠として用い、データの蓄積により見直し修正する。なお、本研究における事例研究の対象者

は、これまでの研究で、大学3年次、卒業2年後の授業データを保持している8名を基本とするが、対象者のライフイベントなどの状況やデータの収集状況により卒業後の年数の幅を広げて対応する。

【実証研究(比較研究)】大学3年次学生が実施した小学校家庭科授業を基に、学習指導案、ビデオ記録、授業で用いた教材をまとめた教材パッケージを作成し、本教材を用いた授業実践を、経験豊富な教員に依頼し、得られたデータを分析する。

(2) 研究の最終年度は、収集した授業データの分析結果を整理し、教員養成段階において重視すべき授業実践力の内容を精査するとともに授業実践力を把握する実証的な方法論をまとめる。

- ① 理論研究、実証研究の分析結果を基に、教員養成教育において重視すべき実践的指導力の要素を整理する。
- ② 教授・学習行動、発話記録、児童生徒との対応、教材、教材を用いる際のタイミングや教授方略の視点から分析データを見直し、関連させて考察する。
- ③ 得られた知見に基づき、授業実践力を実証的に把握する方法論を整理し、教員養成教育プログラム(家庭科教育)の改善材料とする。

4. 研究成果

4年間の研究を通して、収集した授業実践データは、計32時間分の授業(授業者数15人)であった。以下に、授業実践力をとらえる評価枠、大学3年次からの授業実践力の変容を整理した事例研究、学生と経験豊富な教員の授業の比較研究に関する主な成果を報告する。

(1) 授業実践力の変容をとらえる枠組み

これまでの家庭科教員養成における授業実践力の養成に関する研究を通して、試作した授業実践力をとらえる評価枠(7要素、31項目で構成)を用いて、12授業のデータを分析した(学会発表④)。その結果、春期教育実習を起点として秋期教育実習でとらえた成長は、基本的な授業を行うために知識・技術を身に付けつつある姿であった。また、子どもへの対応と多様な授業の構成として成長する姿がみられた点が確認できた。

このように、評価枠を用いた分析を通じて、養成段階から初任期の授業で確認された成長や課題は、実施時期による内容の違いだけでなく質的にも異なっていることを確認することができた(図1)(論文③)。

これらの成果を受け、養成段階から教職10年程度の期間において、養成から採用・研修段階を通して身に付ける授業実践力の構成要素を整理した。また、構成要素の習得時期について、養成・採用・研修段階に分けた試案を提案した(図書①)。

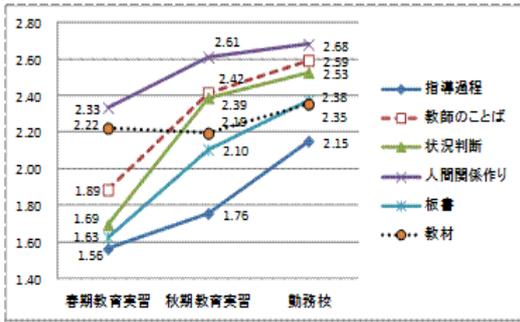


図1 要素別授業評価の結果 (4授業平均)

(2) 教師の成長をとらえる事例研究から

養成段階から約10年の期間における授業実践力の変容について、大学3年次の春期・秋期教育実習と卒業後8年・10年後の4授業を対象に分析するとともに、分析対象者が自身の10年間の教職生活を省察した記録を合わせて、教師の成長について考察した。

その結果、指導過程や教授行動にかけられる時間の割合において、これまでの研究成果を支持する一貫した傾向が認められた。また、4授業の使用教材を分析した結果、ワークシートの記述欄は、単純に書き写せばよいような思考を必要としない欄が減少し、子どもが関連付けたり考えたりしなければ記述できない欄を多く用いる傾向が確認された(図2)。全体を概観すると、教材は、教師が自身を助けることから子どもを支援するために用いるなど、教材を用いる目的に変容が認められた。あわせて、授業改善に向かうためには、教師が課題を認識するだけでなく、課題が顕在化されることが契機となることが示唆された(学会発表①)。

基準	大学3年春期	大学3年秋期	卒業8年後	卒業10年後
基準1	・キーワードの穴埋め	・キーワードの穴埋め		
基準2	・実験結果の記入	・キーワードの穴埋め廃棄率を求める式の記入		
基準3	・飲料の銘柄を予想 ・感想	・感想	・班で相談して決めた手順、分担を記入	・遊び年表に貼り付けた付箋を材料に、相談して見出した遊びの共通性を記入
基準4	・予想の理由 ・実験結果からわかったこと			・ビデオ視聴により言葉、表情、つながりの視点から見出した特徴を記入 ・幼児にとっての

基準1：板書をそのまま書き写す
 基準2：実験結果や観察結果を記入する
 基準3：感想や気づき、班での相談・協議内容をまとめ記入
 基準4：学習を踏まえて理解した内容を自分の言葉でまとめ記入する

図2 ワークシートの記入欄に求める思考の深さ

(3) 授業経験の異なる授業者による授業の比較

養成段階の学生が行った授業と、経験豊富な教師が再構築した授業の、計10時間を対象として、どのような違いが表れるのかを比較した。その結果、教師が行った授業は、より子どもの思考を重視して学習過程を構成していることなどが分かった(学会発表③)。

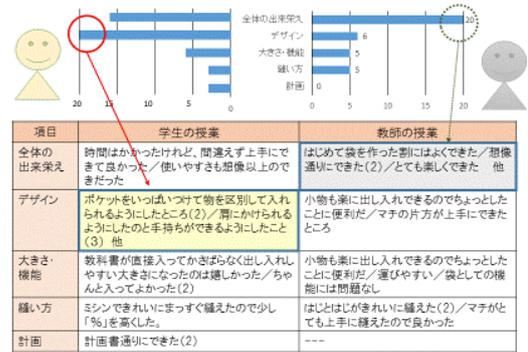
また、大学4年次学生と経験豊富な教師が、

学習目標と教材を共通にした授業を実施し、授業における授業者の考え方や授業の仕方などのこだわりの違いが、児童の学習活動に対する取り組みや成果にどのような影響を及ぼしているのかを検討した。小学校5年生の家庭科「布を用いた袋の製作」を分析対象授業として、学習指導過程(時間配分)や教授・学習行動、作品の完成度、製作活動に対する満足度とその理由を基に検討した。

その結果、①学生は個々の児童が製作目的を意識して進めることにこだわり、教師は、学習課題を明確にして全体の児童をそろえて確実に進めることにこだわりをもってしていると推察された。また、②授業者のこだわりの違いは、学習指導過程や教授行動の違いとなって示された。例えば、時間配分に関して、学生は子どもの学習を支援するために机間指導の時間を多くとり、教師は、説明や指示に多くの時間を費やす違いとなって確認された。そして、③製作活動に対する満足や課題の理由として、学生の授業を受けた児童は自身が考えた製作目的や計画、工夫に対する成功や失敗を記述し、教師の授業を受けた児童は、製作品の完成度の高低を記述していた(図3)。この違いは、授業者のこだわりの違いが授業を通して影響を及ぼした結果であると推察する。

以上のことから、授業における授業者のこだわりの違いは、結果として子どもの学びの内容や質に影響を及ぼしていると推察された(論文①②、学会発表②)。

満足した点・がんばった点の記述分類



製作学習を通しての課題の記述分類

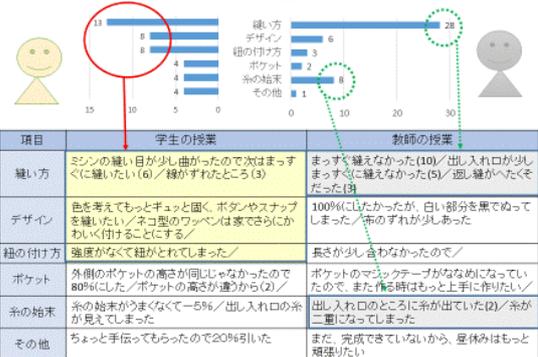


図3 満足や課題の理由の違い

(4) 授業実践力の構成要素を整理するとともに、養成・採用・研修を視野に入れた中で、どの段階での習得を期待するかの一覧表として例示した。また、授業の良否をとらえる評価枠の設定と授業データを用いた検証を行い、評価枠の妥当性を検証した。

これらの取り組みにより、本研究の目的である、「教師としての成長を授業実践に関わる力量形成の視点から把握する実証的方法」の基礎が得られたと考えるが、教員養成教育において重視すべき実践的指導力の抽出には至っていない。

(5) なお、本研究期間に収集した授業実践データについて、基礎データの整理は終わり、何件かの学会発表や論文等として研究成果を公開した。一方で、収集データは膨大で複雑であるため、すべてのデータを深く分析できていない。各授業者の授業実践力の変容をとらえるためには、分析対象者のライフステージと関連させた深い解釈が必要であるとともに、長期にわたる観察が不可欠である。また、事例研究（個々人の教職経験に伴う成長）と比較研究（熟達ステージが異なることによる相違）とを、相互に関連させて考察することも研究を深める重要な手続きである。しかしながら、4年という研究期間で、これらの内容については、研究途上である。今後も、収集データの分析・考察を続け、教師の力量形成を授業実践力の変容からとらえる実証的方法論の構築に向けて研究を深めていきたい。

<引用文献>

・上野ひろ美，松川利広，小柳和喜雄(2005) 教員養成におけるカリキュラムフレームに関する予備的研究：米国，英国，独逸の研究を参考に，教育実践センター研究紀要 14, 147 - 155
・その他の論文等は，以下の発表論文等に対応させて表記した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

- ① 高木幸子・佐藤雪菜(2015) 授業における教師のこだわりの違いが子どもの学びに及ぼす影響 - 小学校家庭科における学生と熟練教師が行った製作学習から，日本家庭科教育学会誌第 58 巻 1 号，12-23 (査読有)
- ② 佐藤雪菜・高木幸子(2015) 小学校家庭科において考えることを重視した製作学習の検討，教材学研究，第 26 巻，59-68 (査読有)
- ③ 高木幸子(2013) 養成段階から初任期に見られる授業実践力の変容：家庭科教員養成課程の学生を対象として 日本家庭科教育学会北陸地区 30 周年記念誌，31-44 (査読有)

〔学会発表〕(計7件)

- ① 高木幸子，中学校家庭科授業における教師の成長と教材使用の変容 - 大学3年次から12年間の授業記録に基づく事例研究から -，日本教材学会第27回研究発表大会，2015年10月10-11日，東京学芸大学
- ② 高木幸子，熟達教師による家庭科授業の再構築の分析：学習過程や教授方略の視点から，日本家庭科教育学会第57回大会，2014年6月28-29日，岡山大学
- ③ 高木幸子，学習過程と教授方略の視点から見た熟達教師による授業の再構築の分析，日本教育工学会第28回大会，2012年9月14-17日，長崎大学
- ④ 高木幸子，授業場面での教師としての成長をとらえる授業評価項目の検討，日本教材学会第24回研究発表大会，2012年10月19-20日，福山平成大学

〔図書〕(計1件)

- ① 高木幸子，2016，家庭科授業がわかる・できる・みえる：家庭科教員養成における授業実践力の養成，印刷中，教育図書

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 幸子 (TAKAGI Sachiko)
新潟大学・人文社会・教育科学系 教授
研究者番号：70377175

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし